

使用頻度別語彙の観点から見た日本の大学におけるイタリア語教育

——課題と展望——

アルベリッツィ、ヴァレリオ・ルイジ

はじめに

数十年前まで、第二言語習得論においては、語彙の教育と習得は意外にも軽視され、二次的な分野とみなされていた。これは、語彙の研究および外国語教育への応用が統語論や音韻論などと異なり、特定の範囲を捉えにくいいため、他の言語的な特徴を記述するために用いられていたモデルやルールなどで分析できない言語能力の一部であるという言語学者の固定概念によるものとされている¹。しかし、単語を迅速に認識することは認知処理により多くの時間を割り当てることを可能にし、既知の単語数が文書や発話の理解能力に直接的な影響を与えることは明らかな事実である。

一般的に、学習者は単語が語学学習における重要な要素であると感じて、積極的な態度を見せるが、一方で教師の関心は言語の骨格を構成する文法の教育に寄せられているため、単語の学習は比較的に簡単で記憶力だけに頼り、教場で十分な注意を払う必要はない活動だと考える傾向がある。

第二に、語彙の知識は主に読書によって得られるものだと常に考えられてきた。しかし、すでに指摘されているように、上記の理念には内部の矛盾がある²。確かに、網羅的な読書によって学習者は語彙を増やすことができる。学習者は単語を学ぶために本を読む必要があるが、同時に、その内容を解読・理解するために最低限の単語を知らないと効率的な読書はできないのである。

上記を踏まえて、どの単語を選択するか、単語をいくつか導入するかなどという問題を慎重に考え、重視した市販の外国語の教科書は極めて少ない状況である。しかし、計量的および質的な単語の選択は教場でしか目標言語を使用できないか、または目標言語との言語間距離が大きい学習者にとって極めて重要な課題である。

一般言語学と第二言語習得において、語彙が長い間、主流の分野から疎外されてきた根本的な理由は二つあると思われる。第一に、他の分野に比べて語彙は開集合であり、その単位を成す単語はほぼ無数であるため、固定の体系に収めることが困難な要素である。第二に、

レベルを問わず、文法と語彙の両方を同時に重視する体系的なシラバスを設計することは非常に難しい課題である³。

今まで述べてきた世界的な状況は日本における外国語の高等教育にも当てはまり、イタリア語も例外ではない。外国語大学などの特例を除いて、イタリア語の授業は欧米学習者向けの教科書と日本人向けの文法書を並行させ、週1・2回程度で行われている。コミュニケーションアプローチの重視が主張されるものの、文法と原本の訳・解釈がまだ主要な位置を占めている。しかし、文法的能力の優れた学習者にも既知の単語の少なさと不足する語彙力が際立っており、低いコミュニケーション能力の要因になっていると思われる。

周知の通り、今日の大学生には、一社会人として異文化コミュニケーション能力が強く求められている技能の一つであり、その育成に当たっては、授業の限られた短い時間内でどのように効率よく学習者に言語運用能力を身につけさせるかが重要な課題となってきた。さらに、イタリアの高等教育機関での留学を目指している学生にとってはハードルがより高く、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）のレベルB2に相当する能力が必要とされており、語学の総合学習時間数が少ない学習者は不利な立場に置かれている。

上記の課題の解決への糸口は、まずは安定した基礎語彙の基盤の構築にあると思われる。しかしながら、その基盤を築くためには、どの単語を教えるべきか、新しい単語をいくつ教えるべきか、生産的な語彙と受容的な語彙をどの割合で取り入れるべきか、単語を効率的に教える方法は何かという、言語学者と第二言語習得の専門家を長らく悩ませてきた質問に答える必要がある。

1. 使用頻度別語彙の応用：背景と諸問題

イタリア語をマスターするために、どのぐらいの単語を覚える必要があるかという質問には明確な答えはない。母語話者の語彙力に関する体系的な調査がまだ行われていない現在では、心理学の研究から得られるデータを当てにするしかない。平均的には、15歳のイタリア人のボキャブラリーは10,000語と30,000語の間にあると推測されている⁴。さらに、母語話者でさえもすべての単語の意味を熟知し、読解や聴解などのような受容的な活動だけではなく、発話や作文などのような生産的な活動でも同等の能力で使用できると考えるのは困難である。そのため、語彙を生産的な語彙と受容的な語彙に分類する必要性が生じる。母語話者の生産的な・受容的な語彙の範囲に関しても正確なデータはないが、一般的には受容的な語彙に比べて生産的な語彙の方が圧倒的に少ないとされている。

第二言語の学習者の場合、母語話者に比べて、量的・質的にもっと幅の狭い語彙力が期待されることは当然である。ここでも、イタリア語に関するデータは極めて少ないが、英語やフランス語などに関する調査によると、一般的なテーマを中心とした会話または文書を大筋

で把握するために学習者には約 1,500 の生産的な単語および約 3,000 の受容的な単語が必要であるとされている⁵。

上記の測定をイタリア語の学習に適用すると、大学生が最初に習得する必要がある語彙は、できる限り一般的で、普及率の高い単語からなる、いわゆる「基礎語彙」であることが理解できる。

イタリア語における使用頻度別語彙の研究は『現代イタリア語の頻度別語彙』(Lessico di frequenza della lingua italiana contemporanea、以下 LIF と略す)の出版された 1971 年に遡る⁶。この研究は、1947 年から 1968 年の間に出版された小学校の副教本、新聞と雑誌、演劇の台本、映画の脚本、小説からなる五つのテキストグループから等分に (100,000 語ずつ)抽出された現代イタリア語の 500,000 語のコーパスを調査した結果である。コンピューターを用いて、最も頻度の高い単語から最も頻度の低い単語まで整理され、当時のイタリア語で最も一般的に使用された約 5,000 語のリストを得ることができた。

LIF のリストを元にして、1980 年に言語学者のトゥリオ・デ・マウロ (Tullio De Mauro, 1932-2017) は自身の著作の付録として『イタリア語基礎語彙辞典』(Vocabolario di base della lingua italiana、以下 VdB と略す)を発表した⁷。他の言語の基礎語彙辞典が数十年前からすでに公開されていたため、イタリア語の語彙研究史において VdB は非常に貴重な業績とされている。VdB は基幹語彙 (vocabolario fondamentale)、高使用頻度語彙 (vocabolario di alto uso)、高可用性語彙 (vocabolario di alta disponibilità) という三つの範疇に 7,050 語を分類し、収集した単語リストとなっている。基幹語彙は LIF から抽出・整理された母語話者によって最も使用されている 2,000 語であり、デ・マウロによると一般的な会話や文書などで用いられている単語の約 90% を占めている。高使用頻度語彙の占める割合は 6% に過ぎないが、この 2,750 語の使用頻度と知識は母語話者の間で極めて高いとされている⁸。高可用性語彙は母語話者が希に使う単語だが、日用品や毎日の出来事と深く関わっているため、熟知される 2,300 語であり、約 2% を占めている。これらの単語は、20 世紀後半のはじめに、使用頻度が高かったためか、あるいは、使用頻度が高いと感じられていたため、イタリア語を話す者に最もよく知られている単語だった。デ・マウロは定期的に各語彙リストを更新し、VdB の改訂版を公開し続けており、最新版は亡くなる一年前の 2016 年にネットで公開された⁹。

学習者に実用的な単語の基盤を築くことを考える際に、どの単語を選ぶべきかを判断するために、VdB は有力な手がかりとなる。基幹語彙を中心に単語を選び抜き、教材を作成すれば、約 4 年間の間に母語話者が最も使用するであろう 2,000 語を教えることに成功する可能性も考えられる。ただし、基幹語彙だけを頼りにして、効率的な発話能力を育成するのは難しいと思われる。最近出版されたイタリア語の単語学習のためのテキストブックは、冒頭に語彙力の自己判断テストを掲載しており、語彙はヨーロッパ言語共通参照枠の A1 から

B2までのレベルを反映するとされている12語ずつのグループに分けられ、学習者はその単語を「よく知っている」、「少し知っている」、「まったく知らない」と回答する。A1の12語には、cognome（姓）、farmacia（薬局）、zucchero（砂糖）が含まれており、これらはすべて高使用頻度語彙として指定されている。上記のテストが示唆する状況を文字通りに解釈するならば、A1の内容を受容・生産するために少なくとも25%の高使用頻度語彙が必要とされることになると考えられる¹⁰。

さらに、すでに指摘されているように、VdBにおける基幹語彙と高使用頻度語彙の選択は統計的な基準に基づいている。一方、高可用性語彙の選択は心的な基準に基づいており、この特徴も念頭に置く必要がある¹¹。なお、VdBの最新版からもう早7年が経っているため、イタリア語に著しい速さで新しく入ってきた単語との関係も考慮に入れる必要がある。これは特にIT分野に関連する単語に関して言えると思う。例えば、VdBにはcomputer（コンピューター）、web（ウェブ）、internet（インターネット）などが基幹語彙として指定されているが、tablet（タブレット）やsmartphone（スマートフォン）などはリストに含まれていない。

2020年から2022年にかけて改正された学習指導要領における英語の初等・中等教育の手法を模範とし、大学でイタリア語を学ぶ学習者も4年間の学習期間内で、可能な限り、新たに設定された「五つの領域」を習得することを目指さなくてはならないと考えられている。具体的には、「聞く」、「読む」、「書く」といった能力の向上を図ると同時に、双方向のコミュニケーションである「話す（やりとり）」および自身の考えや身近な出来事を相手に伝える「話す（発表）」のスキルを磨く必要がある。さらに、現在の大学生にとっては、公式に認められたイタリア語能力の証明を取得することが肝心な問題となっている。これは、イタリア留学を志す者だけではなく、外資系企業などで社会人としての活躍を目指す者にも共通する課題である。近年、イタリアへの就労ビザ申請などで、一定の語学能力の証明が求められるケースが増加しており、現地での円滑な業務遂行が可能な言語運用能力を有する人材が雇用側にとって価値ある存在とされているからである。

上記の現状を考慮すると、イタリア語の現代高等教育において語彙が担っている重要な役割を再確認することができる。限られた時間内で、学習者は1) 通常の授業を支障なく理解できる、2) 自由かつ効率的なコミュニケーションを可能にする、3) 言語能力検定試験などの設問に適切に回答できることを可能にする「多機能的」ともいえる語彙の習得を必要としている。そのため、主な言語能力検定試験とその基準となるヨーロッパ言語共通参照枠がどのように語彙を捉えて、評価しているのかを調査することが必要である。これによって、学習者に適した有用な語彙を提供することが期待される。

1.1. ヨーロッパ言語共通参照枠と語彙

ヨーロッパ言語共通参照枠は、主に学習者のニーズに重点を置いた学習内容・授業計画および実用的な言語運用能力を学習目標とするコミュニケーションアプローチという二つの概念を中心に展開されている。

語彙能力は六つの基本的な能力の一つとして位置づけられており、具体的には「言語の語彙知識と、その語彙を使いこなす力で、語彙的な要素と文法的な要素から成る」と定義されている¹²。語彙的な要素は挨拶、諺、定型句などのような「いくつかの単語から成り、一まとまりに学習される」「定型表現」と曜日名や度量衡の単位などの単語群を含む一般的な単語の「単一語」に分類されている¹³。

「言語学習と言語教育」と題する第六章では、語彙力と学習者がその能力をどのように向上させるかというテーマが取り上げられており、「語彙の量、範囲、およびその使いこなしの程度は、言語習得、学習者の言語熟達度の評価、言語学習・教育の計画に関わる主要なパラメータである」と述べられている¹⁴。必要に応じて、教師には各パラメータについてのどの基準に従うかを開示する選択の自由が与えられているが、具体的な指示は提供されていない。

語彙の選択については、コミュニケーションや文化の観点から学習者のニーズに合わせた単語、統計的な調査から得られた最も使用頻度が高い語彙、レアリアに採用されている単語、語彙に関する特定の計画を立てずにコミュニケーションの課題を通じて学習者の有機的な習得を促すなどの要点が挙げられている。ただし、具体的な量的・質的な指針は提供されていない点にも留意する必要がある。

その結果、ヨーロッパ言語共通参照枠においては、学習者の語彙の使用範囲と熟達度は下記に示された定義に基づいている（表1を参照）。

表1から明らかになっているように、語彙の使用範囲についてある程度の段階が提示されているにもかかわらず、定義に使用されている表現は極めて曖昧であるため、具体的な量的な指標は一切提供されていない。非常に幅広い（very broad）語彙の知識と能力を持つC2

表1. ヨーロッパ言語共通参照枠「語彙の使用範囲」¹⁵

C2	Has a good command of a very broad lexical repertoire including idiomatic expressions and colloquialisms; shows awareness of connotative levels of meaning.
C1	Has a good command of a broad lexical repertoire allowing gaps to be readily overcome with circumlocutions; little obvious searching for expressions or avoidance strategies. Good command of idiomatic expressions and colloquialisms.
B2	Has a good range of vocabulary for matters connected to his/her field and most general topics. Can vary formulation to avoid frequent repetition, but lexical gaps can still cause hesitation and circumlocution.
B1	Has a sufficient vocabulary to express him/herself with some circumlocutions on most topics pertinent to his/her everyday life such as family, hobbies and interests, work, travel, and current events.
A2	Has sufficient vocabulary to conduct routine, everyday transactions involving familiar situations and topics.
	Has a sufficient vocabulary for the expression of basic communicative needs.
A1	Has a sufficient vocabulary for coping with simple survival needs.
	Has a basic vocabulary repertoire of isolated words and phrases related to particular concrete situations.

の学習者に対して、C1の学習者は幅広い(broad)語彙を使いこなすことができる。良い範囲(good range)のB2に対して、B1のレベルを有する者は、使用領域は異なっても、A2の説明にも用いられている十分な(sufficient)語彙力を持っている。A1のレベルを取得すると基本的な(basic)語彙力が認められる。

ヨーロッパ言語共通参照枠は非規範的なガイドラインであるため、どの場面においても適用できる柔軟な立場を取ろうとしている。しかし、この柔軟性があるが故に、レベルの間の境は曖昧になり、これが教材などの作成にも大きな影響を与えている。語彙に関しては、レベルごとに習得する必要がある単語数を設定することができれば、特定の語彙が参照枠内のどの位置にあるか、学習者は学習過程においてどの段階にあるかということがより明確になると考えられる。

1.2. CILS (外国語としてイタリア語検定試験) と語彙

CILSはシエナ外国人大学が実施し、イタリア政府に認定されているイタリア語検定試験の一つである¹⁶。日本ではイタリア文化会館から提供されており、大学でイタリア語を勉強している学習者にとって、さらに克服すべき壁となっている。前述のように、イタリアの高等教育機関に留学するためにはヨーロッパ言語共通参照枠のB2に相当するレベルが求められ、イタリアで就労活動を行うためにも同様の言語運用能力が望まれる。総合的に、日本人の学習者にとってCILSは極めて難しい試験であり、現代イタリアの社会的・文化的な背景の知識と共に、安定した語彙力が求められる点が特に挙げられる。

公開されているCILSのガイドラインによると、語彙の選択は1980年版と1987年版のVdBを参照しており、試験の本文にそのレベルに該当しない語彙や形態統語論的な要素があった場合、内容の理解は文脈から類推できるように設計されている¹⁷。さらに、各レベルの語彙力に関する詳しい記述も提供されている(表2を参照)。

表2に示されているように、CILSのガイドラインはヨーロッパ言語共通参照枠に基づいており、質的・量的にも詳細な指針を提供している。質的な面では、各レベルでの意味領域と使用範囲が特定され、量的な面ではVdBの範疇と一般的な語彙の比率が示されている。ただし、具体的な単語数などの情報は提供されておらず、それらは各レベルの記述文から推測する必要がある。例えば、A1とA2の受験者にVdBの「高頻度の語彙」(parole che hanno un'alta frequenza)の知識が求められており、これは基幹語彙に相当すると考えられる。しかし、基幹語彙は約2,000語であり、基礎段階の言語使用者が受容的な段階でもこれほどの語彙力を持っているとは考えにくいだろう。CILSを紹介するイタリア文化会館のホームページによれば、A1の問題に使用される語彙は約850語で、そのうち600語は「基本語彙」とされており、A2の問題には語彙1,200語が採用されており、そのうち700語は基本語彙と記載されているが、これらのデータの出所は明らかにされていない¹⁹。

表 2. CILS の語彙力に関する記述¹⁸

C2	受験者は慣用表現や口頭表現を含む非常に幅広い語彙力を持っており、単語を適切に、妥当かつ正確に使用する能力を示している。様々な使用域での同義語を作成でき、単語を適切に使用するためにその社会的な意味合いを識別することができる。
C1	受験者は自分の考えを明確に表現できる幅広い語彙力を持っており、単語の不足を言い換えて補完できる。慣用表現や口頭表現を巧みに使いこなすことができる。VdB の語彙と一般的な使用語彙の 15% までを含む資料に対処できる。筆記や口頭表現において、基幹語彙と高可用性語彙を含む語彙力を持ち、高使用頻度語彙の単語も使用できることを証明する必要がある。
B2	受験者は VdB の語彙だけではなく、一般的な使用語彙の 7% までを含む資料に対処できる。筆記や口頭表現において、基幹語彙と高可用性語彙の一部を適切に使用できる。口頭表現において、要点を強調し、自分の意見の裏付ける補足的な要素と適切な例を示しながら、興味のある分野に関する様々なトピックについて説明、ナレーション、または明確な議論ができる。
B1	受験者は日常生活で最も一般的な状況やテーマに対応するため、または多少の躊躇や言い換えを伴っても予測不可能な状況に対処するための語彙力を有する。VdB の語彙と一般的な使用語彙の 5% までを含む資料の意味を包括的に理解する。筆記や口頭表現において、基幹語彙と高可用性語彙に含まれる単語を適切に使用できる。口頭表現において、興味のある分野に関するトピック、ナレーション、感情と印象を伝える出来事や体験について、十分に流暢に話すことができる。
A2	受験者は予測可能なコミュニケーション場面に対応するための基本的な語彙力を有する。VdB の高頻度の語彙を含む資料の意味を包括的に理解する。口頭表現において、日常的な会話に対処し、旅行、食事、宿泊、買い物などの日常生活における予測可能な親しい場面に関する質問や返答、情報交換ができる。家族、人々、画像について簡単に説明することができ、個人的な経験、現在と過去の活動、日常的な習慣や行動、生活・仕事の状況、日課などについて話すことができる。簡潔な表現で好みや嫌いを表現することができる。
A1	具体的なコミュニケーション場面に関連し、単純なサバイバルニーズに対処するための単語や表現からなる基本的な語彙力を有する。受験者は VdB の高頻度の語彙を含む資料の意味を包括的に理解する。口頭表現において、自分自身、家族、学校、自由時間、通っている場所など親しいテーマに関して情報を交換できる。さらに、自分や他の人、場所、生活の状況について簡単に説明し、好みや嫌いを表現できる。

なお、レベル B1 から VdB の語彙に加えて「一般的な使用語彙」(lessico comune) も導入されている。各レベルで満たすべき比率が指摘されているが、これらがどの基準に基づいて選択されたかは明示されていない。イタリア語の一般的な使用語彙は約 45,000 語とされており、B1 レベルで求められている 5% は約 2,250 語に相当する。さらに、筆記や口頭表現の両方で、基幹語彙と高可用性語彙に含まれる単語を適切に使用できる能力も求められている。そのため、B1 の受験者は約 9,300 語の受容的な単語と約 4,300 語の生産的な単語を使いこなす必要があると考えられる。

1.3. 実用イタリア語検定試験と語彙

実用イタリア語検定試験（以下「伊検」と略す）は 1995 年に設立され、日本国内で唯一全国的に行われるイタリア語検定試験である。2023 年からは外務省の後援事業として認定され、年間約 4,000 人のイタリア語学習者が受験している。受験者の年齢層は幅広く、2022 年のアンケート調査によれば、20 代が最も多く（23.4%）、30 代を含めると受験者全体の 46.5% を占めている²⁰。

本試験の名前が示す通り、実用性に焦点を当て、日常会話などですぐに役立つコミュニケーション能力を養成・評価することを目指している。大学でイタリア語を学んでいる学習者に

とって、伊検はイタリア政府が認定するイタリア語検定試験に比べて難易度が低く、国内で認められているという利点があると思われる。

伊検のシラバスは公開されておらず、各レベルの記述文からも出題方針を把握できないが、市販の対策本から求められている文法の知識を一定程度類推できる。語彙に関しては、4・5級と3級の単語集が出版されており、前者は約1,800語、後者は約1,700語を収録している²¹。各書の前書きによれば、4・5級の単語集は過去の出題から最も頻度の高い1,300語を抜粋した上で品詞別に整理され、それに基礎知識とされている約500語からなる語彙や表現が加えられている。3級の単語集は同じ基準の下で編集されており、受験者の語彙力の向上を念頭に置いて、意味領域の拡大、同義語、反対語だけではなく、専門用語にも配慮がされている。

2. 本調査の趣旨、目的および応用

ここまで述べた事情を考慮し、筆者は週1回程度でイタリア語を勉強する基礎段階にある学習者にどの単語やいくつの単語をどのように教えるべきかという課題に取り組んで来た。基礎段階にある学習者に教える単語の選択は安定した基盤を構築するために重要で、多くの問題を伴う課題でもある。このレベルの語彙は、許容できる量で導入されるだけではなく、主な使用場面や学習者が情報交換や伝達に必要とするであろう意味領域の状況も反映する必要がある。さらに、少ない回数でイタリア語を勉強しているほとんどの大学生は授業時間以外の事前・事後学習のために平均約30分しか使っていないとされているため²²、短期間で語彙の学習を促進させる方法も検討する必要がある。最後に、選択された語彙は、授業での学習、母語話者とのコミュニケーション、検定試験などといった使用領域を、なるべく広くカバーできるようにする必要がある。

2.1. 調査内容・方法

上記で定義した特徴を持つ語彙を特定するために、まず、イタリアで出版され、日本でも使用されているA1とA2のレベルをカバーする教科書に採用されている単語を抽出した²³。この単語リストを2016年版のVdBと実用イタリア語検定試験の5・4・3級の単語集に加えて、統計データに基づいて作成された頻度別のイタリア語基礎辞典と欧州の学習者向けの辞書に収録されている単語に照らし合わせた²⁴。

一見して、上記の資料の選択は一貫性に欠けているように思われるが、入門や初級の日本人学習者に多岐にわたる場面で使用できる基礎語彙を提供するためには、多彩な資料を調べる必要があると考えられる。さらに、研究や教育の目的で、イタリアと日本で作成されている教科書、単語集、辞書・辞典などの類いを調査対象にすることで偏りのない結果が得られ

る。イタリア語で使用されている語彙の網羅的な現状を提供するために今まで発表された頻度別の語彙リストと異なり、本調査の目指すところは、教場や教材の作成にすぐ使用できる、日本人学習者のニーズに合わせたサバイバルイタリア語の語彙集である。

このように集計された単語は第一群と第二群に整理された。第一群の語彙は調査対象資料の65%以上に収録された1,883語を集めており、第二群には資料の65%以下に出現する661語がまとめられている。第一群の語彙は最も使用頻度の高いものであり、VdBの基幹語彙がその約80%を占めており、または、上記の頻度別のイタリア語基礎辞典と欧州の学習者向けの辞書に収録されていることが調査の結果を裏付けているようである。

選択された語彙が、信頼性のある標本を構成していることを再確認するために、2017年に出版されたイタリア語学習者向けの教材で、最も頻度の高いとされている1,000語を収集した語彙集と比較した²⁵。他の文献と異なり、この本は外国人学習者に有用な単語を教える点で、本調査の目的と一致しており、貴重なデータを提供していると考えられる。調査の結果、1,000語すべてが第一群と第二群の2,544語に含まれていることが判明した。

心理学の研究が指摘しているように単語は数が非常に多く、数ミリ秒で抽出されるため、脳に偶発的に蓄積されているわけではないとされている。最も行き届いた説によれば、単語は協応関係（例えば、塩・ペッパー）、連語関係（例えば、塩・水→塩水）、階層関係（例えば、赤→青→緑）、同義・反意関係（例えば、大きい・小さい）を通じて、蜘蛛の巣のような構造で結びついている²⁶。そのため、第一群と第二群の単語を実際に教材などで使用する前に、学習者にどのように提供するかという問題にも取り組む必要がある。

上記の関係をより効果的に構築するため、意味領域別での単語の整理は、その習得を促進すると考えられており、実際、市販の教科書の過半数以上がこのアプローチに従っている。しかし、教えるべき意味領域の選択や順序などには一貫性が見えないことも事実であり、採用すべき単語と同様に、各教材の著者の母語話者としての判断に委ねられていると考えられる。例えば、入門の早い段階で自由時間やレストランで役立つ単語と表現を導入するよりも、学習者が日常的に接する物や活動と深い関連性のある単語のほうが、定着しやすく、脳内で単語同士を結ぶ網状組織の形成に大きく寄与すると思われる。

基本的な意味領域を特定するために市販のビジュアルディクショナリーを調査し、カテゴリー別に単語を分類する教科書を調べた²⁷。その結果、頻度別での代表的な意味領域は「世界の国」、「学校」、「仕事」、「家族」、「街」、「色彩」、「月・季節」、「果物」、「野菜」、「服・衣類」であることを確認した。調査から明らかになっているように、「家」や「交通機関」など、一般的なイタリア人にとって「通常」と捉えられる分野は、最初の10位に入っておらず、これは教材などを設計する際に重要な留意点である。

2.2. 調査の応用

2.1 で述べた方法で特定した語彙と意味領域の有用性を追求するために、筆者はそれらを中心に、はじめてイタリア語を学ぶ人や入門イタリア語の断片的な知識しか持たない日本人学習者を対象としたデジタルテキストブックを作成した。各ユニットは七つのセクションからなり、それぞれ特定の言語運用能力の育成を目指している。

セクション1は新しい文法を導入する会話とロールプレイを中心に構成されており、セクション2は新しい語彙を中心とした会話、練習問題、読解、聴解を通して、学習者の語彙力の向上と強化を目指している。セクション3は日常生活で役立つ表現を中心に、イタリア語によるコミュニケーション能力の向上を焦点としている。セクション4は発音ドリル、セクション5は文法項目の説明、セクション6は到達度確認を目的とする練習問題である。最後に、セクション7は各ユニットで使用された単語をまとめた単語集である²⁸。

この教材は5課で構成されており、週1～2回程度、90～100分の授業で、大学の一学期でヨーロッパ言語共通参照枠やCILSのA1のシラバスの前半に到達するために設計されている。文法の説明や例文に使用されている用語、固有名詞および国籍を示す形容詞を除いて、全文で表現力の核となる名詞、動詞と形容詞は334語が採用されており、そのうち109語は発音ドリルのセクションで用いられているため、読解、聴解、ロールプレーなどで学習者が遭遇する単語数は225語になっている。

量的に、この単語数は、認知負荷を最低限に抑えつつ、語学学習に費やす時間が少ない学習者に適しているように思われるが、質的にも基本的なコミュニケーションを可能にする必要がある。VdBと比較すると210語(62.8%)は基幹語彙で、81語(24.2%)は高使用頻度語彙、27語(8%)は高可用性語彙であることから、選択された単語は十分に基準を満たしていると考えられる。上記のカテゴリーに含まれていない16語(4.7%)の中には *appetito* (食欲)、*giornaliero* (日常の)、*maglione* (セーター)、*tabaccheria* (たばこ屋)、*volpe* (狐)、*vulcano* (火山) のように発音のセクションで用いられている単語がある。また、*chimica* (科学)、*fisica* (物理学)、*geografia* (地理学) のような分野としては登録されていない単語もあるが、*chimico* (化学的・化学者) と *fisico* (物理的・物理学者) は基幹語彙に、*geografico* (地理的) は高可用性語彙に含まれている。さらに *maggiore* (より大きい) はないものの、その反対語である *minore* (より小さい) は基幹語彙に含まれており、*ombrello* (傘) はないが、もっと希に使用される *ombrellone* (ビーチパラソル) は高可用性語彙としてVdBに入っている。最後に、VdBに含まれていない単語は、*commesso* (店員)、*lettere* (人文系)、*righello* (定規)、*temperamatite* (鉛筆削り) そして *part time* (パートタイム) の五つだけである。簡単に推測できるように、前述の4語は「仕事」、「学科」、「学校」といった意味領域で使用されており、唯一の借用語である *part time* は、アルバイトをする日本人の大学生にとって欠かせない表現である。

発音のセクションで採用されている 109 語のうち、53 語 (48.6%) は基幹語彙で、36 語 (33%) は高使用頻度語彙、12 語 (11%) は高可用性語彙である。また、先述の中にあつた 8 語 (7.3%) は VdB に含まれていない²⁹。イタリア語の発音を指導する多くの教材は、必然的に、発音の重要性を強調しているため、単語の意味や使用頻度などをあまり考慮していないようである。しかし、入門・初級の教材で使用される語彙は、できる限り、実用性と有用性を兼ね備える必要がある。上記のデータが示すように、本調査から得た単語は音声学などの専門的な分野にも対応しており、正確な発音を学ぶことによって学習者に語彙力をさらに拡充する機会を提供している。

イタリア語の最初の 42 語を紹介する第 1 課を除いて、各課のセクション 2 は新しい語彙を提供することを目的とする。2.1 で特定した「学校」、「街」、「家族」、「学科」の意味領域を中心に平均 15 語を取り上げ、それらを使用する場面のロールプレーが導入されている。

最初の 42 語はイタリア語の音を包括的に紹介する単語で、その中で、31 語 (73.8%) が基幹語彙で、9 語 (21.4%) が高使用頻度語彙、2 語 (4.7%) が高可用性語彙である³⁰。第 2 課では、学生が授業で常に携帯しているまたは教室にある物を示す 14 語が導入され、そのうち基幹語彙は 3 語 (21.4%)、高使用頻度語彙は 7 語 (50%)、高可用性語彙は VdB に含まれていない単語と同様に 2 語 (14.2%) である³¹。このデータは、学生が教師との会話、ロールプレーなどで必要とする、penna (ペン) や matita (鉛筆) などのような、教室で頻繁に目にする物を示す単語が、イタリア語の日常的な会話からやや離れていることを裏付けている。

第 3 課では「街」というテーマが取り上げられ、11 語の中で、80% 以上の 9 語が基幹語彙 (81.8%) で、残りの 2 語は高使用頻度語彙 (18.1%) である³²。街の構造に関する語彙は、入門の教科書ではしばしば見過ごされがちな意味領域の一つであり、主に初級または中級で道案内に役立つ表現を導入する際に頻繁に採用されると考えられる。しかし、イタリア語を一学期だけで学んだ後、留学する学習者は via (通り)、viale (大通り)、piazza (広場)、strada (道路)、centro (中心街) などの単語を使用する機会が多いと予測される。

第 4 課では家族関係を示す 9 語が提供されており、高使用頻度語彙である cugino (いとこ) を除いて、予想通り 88.8% の単語が基幹語彙である³³。ただし、先述にもあつたように、VdB に含まれてはいないが、fratello/sorella maggiore (兄姉) と fratello/sorella minore (弟妹) の対立を表現するために、maggiore を対象外の単語として導入する必要がある。

「学校」の意味領域の拡大を目指す第 5 課では文系と理系の主な学科名が紹介されている。合計 16 語の中で、8 語 (50%) が基幹語彙、5 語 (31.25%) が高使用頻度語彙、3 語 (18.7%) が VdB に含まれていない。対象外の chimica, fisica, geografia についてはすでに述べたが、文系と理系の別に注目すると理系には 1 語の基幹語彙 (12.5%)、5 語 (62.5%) の高使用頻度語彙および 2 語 (25%) の対象外語彙がある。一方、文系には基幹語彙が 7 語 (87.5%)、対象外語彙が 1 語 (12.5%) あるという興味深い結果が得られる。

3. 循環型語彙学習方略における ICT の役割

最新の教育理論によれば、学習者が個別に関与し、学習過程に能動的に参加する学習方略が学習効果の向上に寄与するとされている。語彙学習においては、「強化」と「反復」が極めて重要な役割を果たしていると考えられている。新しい単語とその意味を学習者が関連付け、長期記憶に定着させるために、同じ単語を異なる文脈などで何度も繰り返し、提供する必要があるとされている。

反復に関連して、どの程度の時間の間隔で行うべきか、および何回行うべきかという問題が存在し、専門家の意見は必ずしも一致していない。後者については、先行研究のデータをまとめると、一つの単語が確実に覚えられるためには、5～16回の繰り返しが必要であるとされている。そのため、外国語の教科書の設計にあたって、語彙の分布と密度を考える際、この点を十分に考慮に入れる必要がある。

筆者が作成したテキストブックでは、この課題が複数の観点から取り組まれている。まず、各課のセクション7では、そのユニットで使用された単語がインタラクティブな単語集にまとめられている。各単語をタップすると、その単語が使用されているページにジャンプする。さらに、単語のリストに右から左へスワイプすると、日本で暗記法としてよく利用されているチェックシートが表示される機能も備えている。この工夫により、学習者はなじみのある方法で単語を勉強し、覚えていない単語があれば、タップするだけでその単語が用いられている部分を閲覧し、辞書に頼らず文脈などから意味を推測できると考えられる。

第二に、テキストブックの本文と練習問題で採用されている語彙との関連性に特別な注意を払った。練習問題に使用されているすべての単語は、すでに会話、読解、聴解、活動などで取り上げた単語である。このように設計された練習問題により、学習者は問題解決に専念できるだけでなく、問題の本文を読む課程で、内容の理解に不可欠な単語の復習も行っている。また、練習問題は BookWidgets を用いて作成されており、回答が提出されると、学習者の端末にフィードバックが表示される利点がある³⁵。毎回の授業の最初の15分は前回の授業で取り上げられた文法と語彙を中心とした復習練習に割り当てられている。BookWidgets 経由で学習者の端末に二つの練習問題が送られており、学習者は個人的にまたはクラスメートと協力して反復練習を行う。フィードバックが個人の端末だけに送られるため、不安やエラーへの懸念が緩和される効果も期待できる。

第三に、Quizlet という単語学習サービスを利用して、テキストブックのすべての語彙に基づくデジタル単語カードを作成した³⁶。フラッシュカードによる学習は、ある刺激に対して反応を連合させる対連合学習 (PAL-Paired Associate Learning) の一種とされており、短期間での学習効果や長期記憶への定着などの利点が指摘されている³⁷。さらに、紙媒体の

伝統的なフラッシュカードに比べて、デジタル単語カードのほうがより効果的な学習を可能にするという指摘もある。

各学習セットは、「職名」、「基数」、「曜日」などのそれぞれの意味領域に分けられており、単なる単語カードだけではなく、学習者が自分の端末にインストールされているアプリ、またはウェブブラウザ経由でアクセスできる様々な理解度チェックのツールを提供している。教室での活動においても、Quizlet は Live という有力な機能を提供している。Quizlet Live は学習者をチームに分け、あるセットの知識についてチーム同士が対戦するリアルタイムゲームである。すべてのチームに一つの単語や画像が表示され、それに合った定義を選択する。しかし、各メンバーには回答となるカードの一部しか表示されていないため、メンバー同士で協力しないと最後まで進むことができない仕組みになっている。

上記で示したように、バランスのとれた ICT の活躍は語彙の学習に大きく貢献することができ、特に、反復に重点を置いた学習者の積極的な参加を促す循環型学習方略を促進する可能性を秘めている。

4. おわりに

現代の外国語教育において、特に自国語との言語間の距離が大きい場合、認知負荷を軽減し、不安を解消し、短期間で効果的な学習を目指すために、バランスのとれたシラバスの設計は非常に重要な課題である。しかし、過去には多くの第二言語習得の専門家が文法的な要素を主に注目し、語彙の重要性は十分に考慮されてこなかったという事実がある。

第二言語としてのイタリア語教育の場合、本国イタリアでは学習過程において語彙が担う役割が新たに注目されており、市販の教科書にはその成果はまだ具体的には現れていないものの、近年、使用頻度別の語彙研究に基づいたイタリア語学習者向けの単語リストや語彙力向上を目指す教材が数多く出版されている。一方、日本では、大学生向けのほとんどの教科書は文法項目を導入するために考えられたミニ会話や場面的なスキットを中心に設計されており、語彙の選択は著者の個人的な感覚に任されていると言える。さらに、日本人の学習スタイルに合った単語集が数多く出版されているにもかかわらず、単語の選択基準を明示しない著書も多い。

本稿では、留学、就労そして言語運用能力の認定など、現代の学習者が直面する課題を克服するために、基礎語彙の位置および頻度別語彙に基づく教材の設計とそれに関連する学習方略について考察した。調査とその応用が示したように、意図的かつ綿密な語彙の選択に重点を置いた教材の作成は、文法的な枠組の中で有用な語彙を活かすことにより、学習者のニーズにより適応し、限られた短い時間内で基本レベルのコミュニケーション能力の確立に貢献できる。

変わりつつある現代社会の要請に応えるために、語彙はヨーロッパ言語共通参照枠やイタリア政府に認定されているイタリア語検定試験などが規定する範囲と照らし合わせ、定期的に更新する必要がある。そのため、教場内外でのICTの支援は不可欠だと考えられる。紙媒体の教材に比べて、ICTを中心としたアプローチは教材の更新をより簡単にし、迅速に言語や社会などの変化に適用することを可能にしている。

さらに、教育的な観点からすると、ICTを採用した語彙学習方略は、社会的方略、記憶方略、認知方略および自己管理方略など、多岐にわたる学習方略を可能にし、学習者の体験を中心に据えた「強化」と「反復」を重視する循環型学習方略を促進するのである。

* 本稿は科学研究費補助金（研究課題：20K00798）による成果の一部である。

注

- 1 Meara P.M. (1984), "The study of Lexis in Interlanguage", in Davies A., Criper C. and Howatt A.P.R. (eds.), *Interlanguage*, Edinburgh, Edinburgh University Press, pp. 225-240.
- 2 Coady J. (1996), "L2 vocabulary acquisition: A synthesis of the research", in Coady J., Huckin T. (eds.), *Second Language Vocabulary Acquisition: A Rationale for Pedagogy*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 273-290.
- 3 Sinclair J.M., Renouf A. (2016), "A lexical syllabus for language learning", in Carter R. and McCarthy M. (eds.), *Vocabulary and Language Teaching*, New York, Routledge, pp. 140-160.
- 4 Oliverio A. (2001), *La mente: istruzioni per l'uso*, Milano, Rizzoli.
- 5 Corda A., Marellò C. (1999), *Insegnare e imparare il lessico*, Torino, Paravia, p. 29.
- 6 Bortolini U., Tagliavini C., Zampolli A. (1971), *Lessico di frequenza della lingua italiana contemporanea*, Milano, Garzanti.
- 7 De Mauro T. (1980), *Guida all'uso delle parole. Parlare e scrivere semplice e preciso per capire e farsi capire*, Roma, Editori Riuniti, pp. 149-183.
- 8 VdBの初版に収められている高使用頻度語彙は、LIFの後半の3,000語を整理し、イタリア全土の中学校三年生の過半数以上から認識された単語からなる。
- 9 <https://www.dropbox.com/s/mkcyo53m15ktbnp/nuovovocabolariodibase.pdf?dl=0>
- 10 Gallina F. (2022), *Hai la mia parola. Imparare il lessico e non dimenticarlo*, Torino, Loescher, pp. 5-6.
- 11 Bisconti V. (2012), "La svolta lessicografica di Tullio De Mauro e i dizionari contemporanei", *Chroniques italiennes web*, 23 (2/2012), p. 11.
- 12 Council of Europe (2001), *Common European Framework for Languages: Learning, Teaching,*

- Assessment, Cambridge*, Cambridge University Press, p. 110. 吉島茂・大橋理枝 (訳・編)、『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 追補版』、東京、朝日出版、2014年、111頁。
- 13 *Ibid.*, pp. 110-111. 同、110-111頁。
- 14 *Ibid.*, pp. 150. 同、172頁。
- 15 *Ibid.*, pp. 112.
- 16 イタリア政府が認定する他のイタリア語検定試験はペルージャ外国人大学が実施する CELI、ローマ・トレ大学が実施する CERT.IT とダンテ・アリギエーリ協会が実施する PLIDA である。
- 17 Barni M. et al. (2009), *Linee guida CILS. Certificazione di italiano come lingua straniera*, Perugia, Guerra Edizioni, p. 13.
- 18 *Ibid.*, pp. 22-42. 日本語訳は筆者による。
- 19 <https://iictokyo.jp/italian-proficiency-test/cils/>
- 20 <https://www.iken.gr.jp>
- 21 京藤好男・アルダ・ナンニーニ共著、『イタリア語検定4・5級突破 単語集』、東京、三修社、2005年。京藤好男・アルダ・ナンニーニ共著、『イタリア語検定3級突破 単語集』、東京、三修社、2015年。
- 22 筆者が教えている大学が行った授業改善のためのアンケート調査によるデータ。
- 23 調査に使用された教科書は次の通りである。Mezzadri M., Balboni P.E. (2009), *Nuovo Rete! A1*, Perugia, Guerra Edizioni; Mezzadri M., Balboni P.E. (2010), *Nuovo Rete! A2*, Perugia, Guerra Edizioni; Costamagna L. et al. (2008), *Io & l'italiano. Corso di lingua per principianti assoluti*, Milano, Le Monnier.
- 24 Sciarone G. (1995), *Vocabolario fondamentale della lingua italiana*, Perugia, Guerra Edizioni; Baldelli I. et al. (2005), *Dizionario fondamentale della lingua italiana per stranieri*, Milano, Le Monnier.
- 25 Tartaglione R. (2017), *Le prime 1000 parole italiane*, Firenze, Alma Edizioni.
- 26 Aitchinson J. (2012), *Words in the Mind: An Introduction to the Mental Lexicon*, Oxford, Wiley-Blackwell.
- 27 Mezzadri M. (1998), *Dizionario per immagini*, Perugia, Guerra Edizioni; Marin T. (2018), *Nuovo vocabolario visuale*, Roma, Edilingua; ELI (2017), *ELI Vocabolario illustrato*, Recanati, ELI; De Mauro T., Cattaneo A. (1996), *DIB. Dizionario illustrato della lingua italiana*, Torino, Paravia; De Renzo F. (2013), *Piccolo dizionario visuale*, Torino, Loescher; Colombo F. (2013), *Attiva il lessico A2/B1*, Milano, Mondadori; Cattunar J. (2013), *Attiva il lessico B1/B2*, Milano, Mondadori; Gatti F., Peyronel S. (2006), *Grammatica in contesto*, Torino, Loescher; Bertoni S., Nocchi S. (2003), *Le parole italiane*, Firenze, Alma Edizioni.
- 28 Alberizzi V.L. (2020 改訂), *Ai posti! I* (<https://tinyurl.com/ysbxt4eu>)
- 29 Appetito, geografia, giornaliero, maglione, ombrello, tabaccheria, volpe, vulcano.

- 30 基幹語彙：amico, bambino, chiesa, cena, città, donna, estate, fiore, gatto, giorno, bottiglia, bagno, inverno, ieri, luna, mattina, notte, banca, ora, oggi, pranzo, ristorante, mare, sole, mese, pesce, televisione, università, uomo, vento, stanza. 高使用頻度語彙：colazione, erba, ghiaccio, gelato, hotel, fungo, invito, quaderno, zaino. 高可用性語彙：infermiere, sveglia.
- 31 基幹語彙：sedia, libro, borsa. 高使用頻度語彙：banco, agenda, gomma, quaderno, dizionario, penna, matita. 高可用性語彙：lavagna (bianca), astuccio.
- 32 基幹語彙：via, palazzo, piazza, strada, appartamento, campagna, quartiere, casa, centro. 高使用頻度語彙：viale, periferia.
- 33 基幹語彙：nonno, padre, papà, madre, mamma, zio, fratello, sorella. 高使用頻度語彙：cugino.
- 34 基幹語彙：medicina, letteratura, legge, storia, musica, filosofia, politica, arte. 高使用頻度語彙：architettura, biologia, matematica, informatica, ingegneria. VdBに含まれない：chimica, fisica, geografia.
- 35 <https://www.bookwidgets.com>
- 36 <https://quizlet.com>
- 37 Nakata T. (2011), "Computer-assisted second language vocabulary learning in a paired-associate paradigm: A critical investigation of flashcard software", *Computer Assisted Language Learning*, 24, pp. 17-38.

Italian Language Education in Japanese Universities Seen from the Perspective of Vocabulary Frequency: Challenges and Perspectives

Valerio Luigi ALBERIZZI

This paper is based upon three premises. One, for Japanese university students learning Italian, establishing a solid vocabulary foundation is essential to develop effective communication skills in a short period. Two, for those planning on studying at higher-education institutions in Italy, a proficiency level equivalent to CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) B2 is required. And three, many other language proficiency tests certified by the Italian government, such as CILS, are based on the words listed in Tullio De Mauro's *Basic Vocabulary Dictionary of Italian*.

With these three points in mind, the author addresses the challenge of determining which words to teach, how many new words to introduce, and how to teach them to students who study Italian about 1-2 times a week. As part of this endeavor, the author took into account prior research on Italian vocabulary categorized by frequency of use and conducted a comparative study by identifying and collecting the words adopted in major textbooks published in Italy, word lists, and the words featured in the *Practical Italian Language Proficiency Exam* (levels 5, 4, and 3) administered in Japan. As a result, the study identified approximately 2,600 words that are most commonly used in contemporary Italian. This paper discusses the characteristics of this foundational vocabulary and focuses on the creation of ITC-based teaching materials to enhance basic communication skills and their utilization in the classroom.